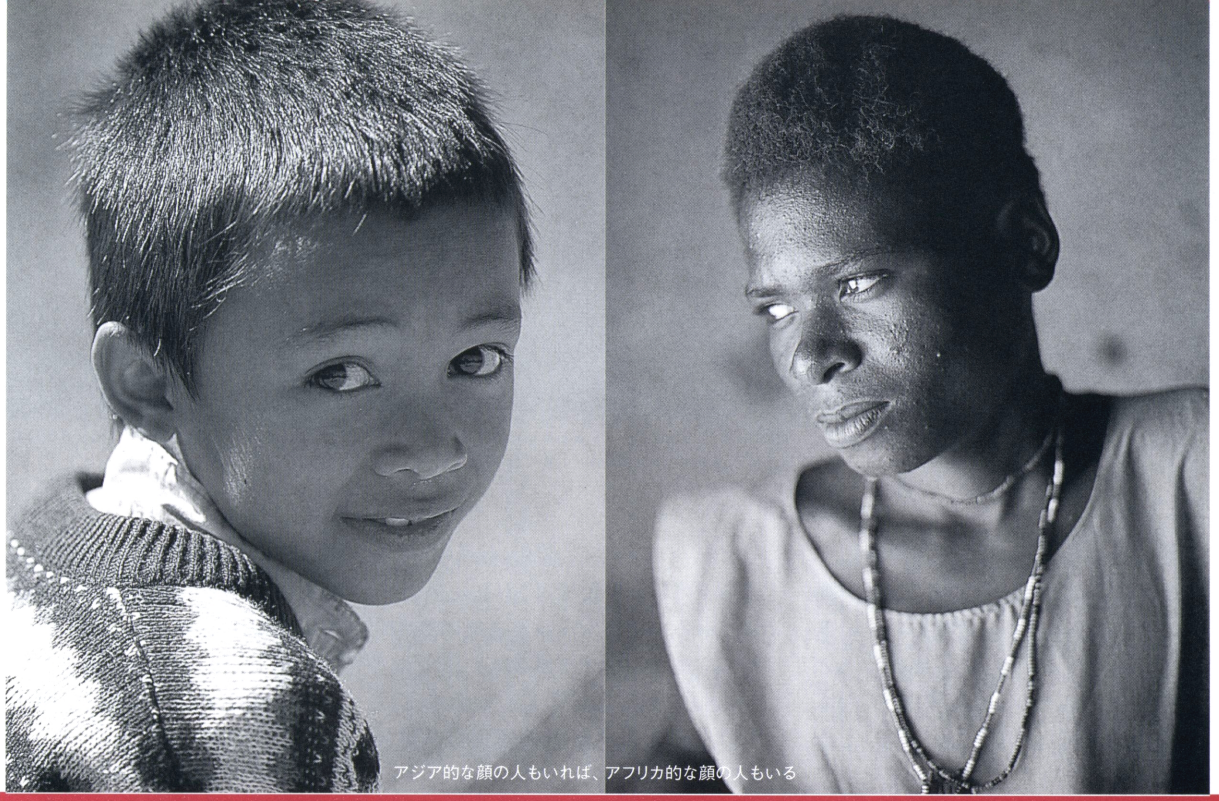
みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

インド洋交流の遺産、マダガスカル (特集 海が結ぶ : Cross over)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯田, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008391



アジア的な顔の人もいれば、アフリカ的な顔の人もいる

インド洋交流の遺産、マダガスカル

アフリカなのにアジアに出会う。マダガスカルはとても不思議な島だ。はるか遠く東南アジアとここを結ぶのは、かつてインド洋を渡ってやってきた人たちだ。

文／飯田 卓（国立民族学博物館）
text by Iida Taku

アジアを伝えるアフリカ

アフリカについて語るとき、いつも気になることがある。さまざまな国に分かれ、さまざまな文化があり、さまざまな言語を話す人がおり、さまざまな自然が見られるにもかかわらず、私たち日本人はひとまとめにして「アフリカ」と呼んでしまいがちだ。アフリカ地域が一枚岩でないことはよくわかっていても、いつのまにかそう呼んでしまっている。そのことに気づくたび、アフリカをもっと知ることの必要性を痛感してしまう。

アフリカに行ったことのない日本人が手っ取り早くその多様性を実

闘鶏のにぎわいも東南アジアを連想させる

ちょっと小ぶりだが、リキシャによく似た乗り物

感したいなら、マダガスカル島について知るのがよい。マダガスカル島はアフリカ大陸から400キロメートルしか離れておらず、この島を領土とするマダガスカル共和国はアフリカ地域に含められることが多い。しかし、この島の文化はさまざまな点でアジア的な要素を受け継いでおり、私たちが抱きがちなアフリカイメージを見事に崩してくれる。

モンゴロイドの末裔

たとえば中央高地近辺の郊外を写真で見てみると、東南アジアから東アジアにかけて見られるような棚田の風景がある。アフリカでは伝統的な稲作がマダガスカルのほか西アフリカなどでも行われているが、栽培品種などの点から考えると、マダガスカルの稲作は明らかにアジア方面からの影響によるものである。

また、マダガスカル固有の言語であるマダガスカル語も、東南アジアの言語と関わりが深い。マダガスカル語は言語学的にオーストロネシア語族というグループに分類されるが、このグループはアフリカ大陸部にはまったく分布せず、東南アジア島嶼（とうしょ）部やオセアニアに広く分布する。インドネシア語やマレー語をご存知の方なら、マダガスカル語の響きになじみを持たれるだろう。もっとも、インドネシア語の「ini」（これ）がマダガスカル語では「iny」（あれ）に、あるいは逆にインドネシア語の「itu」（あれ）がマダガスカル語では「ity」（これ）に対応しているなど、初学者を混乱させる中途半端な類似性もある。

このほか、竹筒の周りに10本の弦を張ったハープや、西海岸に見られるシングルアウトリガー式カヌー、2本の木筒をくりぬいて製作したふいごなど、東南アジアと共通するマダガスカルの物質文化は数多い。だがマダガスカルと東南アジアの関係を何より雄弁に物語るのは、マダガスカルの人々の形質的な特徴であろう。とくに中央高地部に居住するメリナ系の人々の中には、インドネシア人と言っても通用する顔立ちの人が少なくない。それ以外の地域ではもっとアフリカ的な顔立ちの人が多いようだが、新生児のお尻にはしばしば鮮やかな蒙古斑が見られる。マダガスカル人は、われわれ日本人と同じくモンゴロイドの末裔なのである。

カリマンタン島が出発点？

東南アジアと共通の文化的要素は、いつ頃どのようにしてマダガスカル島へ渡ってきたのだろうか。正直なところ、まったく不明というほかはない。それぞれの文化要素が同じ時期に渡来したとは考えにくいから、個別に渡来時期を確定する必要があるが、おそらく不可能であろう。マダガスカルと東南アジアが交流を始めた年代も、確かなことはわからない。マダガスカルへの人の移住は紀元前後という説もあるが確たる証拠はなく、それが東南アジア系の人々であったかということになるとさらに曖昧である。

このように歴史的資料が少ない中で、言語学者のO・ダールが提唱している仮説は、検証の余地があるもののとても興味深い。彼によると、マダガスカル語にもっとも近い言語はインドネシアのカリマンタン（ボルネオ）島におけるマアニャン語であり、カリマンタン島こそがマダガスカルへの移住の出発点になった。この2つの言語はいずれもマ

2本の木筒をくりぬいて製作したふいごも東南アジアと共通

マダガスカルでも稲作が行われている

東南アジアでも見られるシングルアウトリガー式カヌー。
マダガスカルでも同じタイプのものが使われている

写真はすべて堀内孝撮影

レー語の影響を受けていることから、マダガスカル語の原形（原マダガスカル語）を話していた集団がカリマンタン島を離れたのは、島にマレー人の支配が及び始めた頃だったと考えられる。この集団はまずマレー人の手の及ばないスマトラ島近辺に移り住み、ヒンドゥー文化の担い手であるシュリヴィジャヤ朝からも文化的影響を受けた後、マダガスカルに旅立った。この考え方が正しければ、原マダガスカル集団がカリマンタン島を離れたのは西暦650年以前、さらにスマトラ島を離れたのは700年頃である可能性が高い。

古い交易の歴史

だが仮にそうだとしても、インド洋を隔てた東南アジアと東アフリカの交流は、時代をさらに遡ると考えるべきだろう。ダールも、マダガスカルへの移住が起こるまでにはインド洋交易が盛んに行われており、インド洋の航海にたけた船乗りたちが原マダガスカル集団を運んだのだと想定している。

実際、インド洋の東西の間では、日本人が想像するよりはるか以前から長距離交易が行われていた。ローマ時代の数々の著作からは、アフリカや東南アジアの物産がローマ帝国にもたらされていたことがわかる。また、ヨーロッパを仲介としない直接の交渉もあった。中国の正史『宋史』によれば、崑崙奴と呼ばれる人々が8世紀頃からスマトラ島まで連れてこられるようになったという。崑崙奴（クンルンヌ）の故地では象牙やサイの角が特産品であったというから、東南アジア商人のネットワークはこの頃すでに遠く東アフリカにまで及んでいたといえるのである。

インド洋を隔てた東西交流は、その途中のマダガスカルにアジア的な文化要素を残した。21世紀の国際交流は何を残そうとするのか。ひとつ人類史的な視野で考えてみたい。

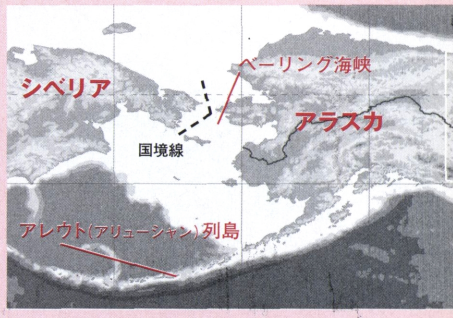
Column

海が閉じる、海が開く

いつも見慣れた世界地図を見ていると、ユーラシア大陸の東端とアメリカ大陸の西端は遠く離れて見える。しかし右の地図を見ればわかるように、この2つの大陸の間に広がるベーリング海峡は、東端と西端では約80キロメートル。海峡に浮かぶロシア領の大ダイオミード島とアメリカ領の小ダイオミード島の間は約5キロメートルしかない。

この海峡の西側、シベリア側にアジア・エスキモー、東側にアラスカ・ユーイット、アラスカ・イヌピアット、カナダ・イヌイット、グリーンランド・イヌイットなど、モンゴロイド系の人々が住んでいる。この海峡を経て、彼らが北アメリカにわたってきたと考えられている。最古の遺跡は紀元前8000年ごろのもので、南西アラスカに残っている。紀元前1800年頃には、シベリアとアラスカにまたがってオールド・ベーリング・シー文化が発達したという。

1867年にアラスカがアメリカの領土になってからも先住民の交流は協定によって認められていた。ところがこのように東と西を結んでいた海峡が、突然閉じられた関係になるのは1948年。これにより東と西の交流は途切れてしまい、親戚が2つの国に分かれてしまったというケースも起きた。そして冷戦終結後の88年から、再び交流が始まっている。親戚を訪問したり、中には結婚をした人もいるそうだ。人の力で越えられる海峡が、政治の力で閉じられたり、開かれたりする。海は豊かな広がりにもなれば、壁にもなってしまう。



今、この2つの大陸をはっきりと分けているのは日付変更線。シベリア東端は地球上でも早くに朝を迎え、アラスカ西端は最後にその日を終える。

＊「エスキモー」という言葉は近隣のアメリカ・インディアンであるアルゴンキン民族による呼称で「生肉を食べる人」という意味がある。彼ら自身は「イヌイット」、「ユイット」、「イヌピアット」という名称を使う。これは「人々」を意味する。